

心の闇を抱える姉は弟達に救われ、弟達のために強くなる。

水音ワールド

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある悪魔の実を食べ、人生が大きく変わってしまったユーナ。心の闇を抱えながらも生活していたユーナはある事がきっかけで過去がフラツシユバックし、能力が暴走してしまう。それにより倒れたユーナを守りたい、支えたいと強く願ったエース・サボ・ルフィはユーナと兄弟になることを決意する。

話し合いの末、3人の姉になつたユーナは弟のために生き弟のためには強くなる。そんな物語…。

オリジナル悪魔の実です。

B L E A C H の織姫を見て思いついた実ですが、能力は少し違います。

## 目次

ルフィがやつてきました。

兄弟になりました。

ユーナの過去が明かされます。

ユーナ、旅立ちます。

ユーナ、アラバスターへ

21 16 12 7 1

ルフィイがやつてきました。

「エース！待ちなさい！怪我の手当て！」

東の海イーストブルーにあるドーン島、コルボ山には山賊の他に2人の子供が住んでいる。15歳の少女ユーナ、10歳の少年エースだ。ユーナはエースの怪我を心配してそう叫ぶが、やんちゃなお年頃のエースだ。聞くわけもなく…。

「大丈夫だユーナ！こんなもんツバつけときや治る!!」  
そう言つて、飛び出していった。

「つたく…」

「ほーつときやいーんだよ。」

ため息をつくユーナに話しかけるはこの家の主カーリー・ダダンだ。

寝つ転がりタバコをふかして、ぶつきらぼうに見えるが根は優しい。

ユーナはその事をこの10年間一緒にいて知っている。

(そんなこと言つて、ほんとはエースのこと心配してくるくせに…)

言葉にして言えば、素直じやないダダンの事だ。怒り出しだろう。ユーナは心にその言葉を留めた。

少し経つた頃、扉を叩く音がこの家に響いた。

「おいダダン！ダダンはあるか!?」

その声に聞き覚えがあるダダンは顔を青くし、急いで扉を開けた。  
「ががが、ガープさん！ホントもうボチボチ勘弁してくれよ!!エースのやつもう10歳だよ！」

ダダンはそう言つて来訪者モンキー・D・ガープに伝えるが、ガープは何知らぬ顔でダダンに伝える。

「今日からここに世話になる孫のルフィイじや。」

「えええええ!!」

そんなこんなでこの家に仲間入りしたルフィイ。エースを追いかけでは怪我をして帰つてくる、という日が何日か続いていたある日事件

が起きる。この日もユーナはエースにあしらわれて怪我をしているであろうルフィのために救急箱を持つて宝の隠し場所に向かっていた。いつもなら大体この辺にルフィが転がっているのだが…今日はいない。無事にエースとサボの元にたどり着いたんだな」と思つていたユーナだつたが、隠し場所について嫌な予感がした。2人は必死に今まで集めていた宝を袋に詰めていたのだ。

「な、何してるの？2人とも。」

「あっ！ユーナ！ちょっと手伝ってくれ!!」

「この場所がバレたんだ！早く場所をうつさないと!!」

そんな2人にユーナは心を落ち着かせてここについてからずつと疑問に思つていた事を問う。

「ルフィは？ここにくる途中いなかつたし、ここまで来たんじやないの??」

ユーナの言葉を聞いて、2人の動きがぴたりと止まる。

その問いにはサボが答えた。

「ルフィってやつは…さつきブルージャムの奴らに連れてかれた。この宝の場所を聞き出すために…」

その答えにユーナは息を飲んだ。エースはそんなユーナの反応にしつてか知らずか、呑気にいう。

「大丈夫だ。あいつは嘘がつけねーやつだ。すぐ喋つて帰つてくるさ。」

「……が…ある？」

ユーナがボソボソと言つた言葉はエースとサボの元には届かなかつた。

「ユーナ??」

連れていかれたルフィの心配より宝の心配をしている2人に…

1人もルフィを助けに行こうとしないところに…苛立つユーナはまくし立てる。

「ルフィが喋つたとして無事に帰つてくる保証がどこにあるの?!?相手は海賊だよ!?それに…あの子は喋らない。ルフィははそういう子なのよ!!あなた達は、拷問されるだろうあの子の気持ちが！恐怖が！:

わからないの!?」

そう言つてユーナは走り出す。

止めるエースとサボを無視して…

走るユーナの顔色は悪く、震えていた…。

ルフイがいるであろう建物を覗いたユーナ…その時、  
その少女から、聞こえるはずがない何かが切れるような音が鳴つ  
た。

しばらく経つてエースとサボもルフイの元に到着し、驚く。

そこにいたのは倒れたルフイと無傷で立ち尽くすユーナがいた。

「ユーナ！ルフイ!! 大丈夫か!?」

サボが呼びかけるも、反応がなく何もない場所を親の仇でも見るか  
のような瞳で見つめていた。エースはこの10年間一緒にいてこんな  
な冷たい目をしたユーナを見たことがなかつた。まるで別人のよう  
で、遠くに行つてしまいそうで怖くなつたエースはユーナの元に駆け  
寄り体を譲ろうとしたが、ユーナの体に触れる前にまるで透明な壁が  
あるかのように阻まれた。

「くそっ！なんだこれ!! おいユーナ!! しつかりしろ!! ユーナ!!」

ユーナの正面に回り透明な壁を叩きながら呼びかけ続けるエース。  
その声が徐々にユーナの耳に届いたのか、エースの目と視線が合  
う。

「…え…す…?」

そう呟いたユーナはそのままスイッチが切れたようにエースにも  
たれかかるようにして意識を失つた。

「ユーナ!!!」

サボはルフイを抱え、エースにダダンの元へ行こうと伝え2人は走  
り出す。その後、ポルシェーミとその部下数名を見たものは誰もいな  
い…。

「ダダン!! ユーナが…!!」

ダダンの元についたエースとサボは急いでユーナを見せる。

それを見たダダンは顔を強張らせ、何があつたか聞く。

「詳しく述べわからねえ。ただ、こいつがブルージャムの奴らに捕まつて…それを知つたユーナが助けに行つたんだ…。」

それを聞き、大体の予想がついたダダンはドグラにユーナを寝かせてくるように伝えたあと、サボとルフイを見る。

「で、ルフイはともかくてめーは誰だ？」

「俺は、サボ…。悪い、ユーナとルフイを見て俺たちの事で巻き込んで危険な目に合わせた…！」

そういう、唇を噛み締め頭を下げるサボ。

「ああ、エースと同じくクソガキだと聞いてるよ。つたく、嫌だ嫌だ、ガキがどんどん増えてくよ。」

そう言つたダダンはルフイを見てため息を吐く。

（ルフイに怪我はなし…いや、この顔色からして大分血が出たはずだ。治つてるが正しいか…）

「とりあえずさつさと風呂入つてクソして寝ろ！ガキども！ルフイは大丈夫だ。すぐ眼を覚ますだろうよ。」

そう言つてその部屋を後にしようとするダダンにエースは聞く。

「ユーナは大丈夫だよな？すぐ眼を覚ますよな！」

ルフイが大丈夫だと聞いて安堵していたサボだが、エースの言葉にハツと気づく。ダダンがルフイ“ば”と言つたことに。

「…さあな。だが、これだけは言つとく。これはユーナの持つている能力の暴走による副作用だ。」

「能力？暴走？なんだよそれ！！」

「それ以上を知りたいなら…！…それ相応の覚悟と代価を持つて本人に直接聞くんだな。」

そう言つて今度こそダダンはその場を後にした。  
残されたエースとサボはその場から動くことができなかつた…。

しばらくして、ようやく動き出した2人はお風呂に入つていた。  
2人の間に会話はない。ただ思いつめたような顔をしている。

風呂を出て、布団に入り込んだサボとエース。この沈黙を破つたのはエースだった。

「なあ、サボ。代価つてなんだ？」

「俺たちが知りたい情報を得るための、代償……かな。」

一金……いやねえよな。」

「…ナはどこで隠したい秘密を俺たちは聞くんだ…その仕事は…俺たちの隠したい秘密つてことじやねえか？」

「だよな…」

この田部屋から話し声が聞こえることはなかつた……

次の日の朝、ルフィの元気に起きる声でみんなは眼を覚ます。

を勢いよく殴る。

「うるせえええ！！黙れ！！」

「俺はエムだからきかん！……ん？……痛くねえ！……ん？……あれ？……本当に

そんなルフィの反応に??を浮かべるエースとサボ。

「お前何言つてんだ！元から怪我してねえーだろうが！」

「まあまあ、さうと捕まへた恐怖から氣を失って変な夢でも見たんだろ。ま、とりあえず、何事もなくてよかつたな、ルフイ！」

い出して、反論した。

夢じゃねえぞ！ 確かに俺 抱きついて 吊るされて リクライグがいいだ  
やつで何回も殴られて…めちゃくちや痛かつたんだからな!! 血もド  
バドバ出てたし!!」

2人は驚愕した。

ルフイが怪我もなく倒れていたことからとつとどしやべつて気絶させられたか気絶したかのどちらかと思つていたからだ。きつとルフイが無傷でいるのはユーナの能力つてやつだとエースとサボは気づく。

「お、まえは、喋らなかつたのか？そんな目にあわされてどーして喋らなかつたんだ!!喋れば助かるのに!!」

「ユーナが言つてたんだ!!エースと仲良くしたいなら、エースにとつて必要な存在になれつて!!しゃべつたら必要な存在になれねえし、もし、言われたこと守れなくてユーナにまで嫌われたら俺は1人になる!!1人になるのはいてえのよりつれえ!!だから俺はユーナとも！サボとも！エースとも!!友達になりてえ！」

そんなルフィの告白にエースは声を震わせながら聞いた。

「お前は俺が必要なのか？…生きてて欲しいのか？」

そのエースの問いかにルフィは何言つてんだ？という顔で。

「当たり前だ!!」

「そうか…。でも俺から必要とされるのにはルフィはまだまだ力不足だな！」

「なにおう!!俺のパンチはピストルのように強いんだ!!」

「へー、やつてみろ」

サボはこの会話でエースがルフィを認めたことに気づく。

ルフィは気づいていないだろう。この会話で初めて、エースがルフィの名前を呼んだことに……。

その後、部屋の中で騒いでいた3人を怒ったダダンが家から追い出すのだが、追い出された3人は仲良く笑っていた。

兄弟になりました。

あの日から、数日経つた。

だが、いまだユーナが目覚める気配はない。

エース、サボ、ルフィはユーナが目を覚ました時、喜んでくれるよう毎日いつものお肉だけでなく山にある果物もとつてきていた。

「今日も日を覚まさねーな…」

「ユーナ…」

「叩けば起きるんじゃねーか??」

「やめろ！」

そんな会話ももう10回目だ。変化のない日々に虚しくなった3人はとつてきた果物を横に置き、自分たちの部屋に戻った。

みんなが寝静まつた頃、ダダンから連絡を受けていたガープはユーナの元へ行く。布団の横に座り込み、大きな手をユーナの頭に置いて優しく撫でるガープの顔は苦しそうだ。

「まだ、心の傷は深く残っているようじゃな…」

（当然じゃ、大の大人でも耐えられるものではない…）

そう呟くガープに、いつのまにか目を覚ましていたユーナははにかんで言つた。

「…今回はちよつとフラツシユバツクしちゃつただけだよ…あはは、久々にどじつちゃつた。」

そのことに驚き、目を見開くガープ。

「起きとつたか…」

「ついいさつきね…大丈夫だよ。ガープさんがそんな顔しないで。私はこの場所で新しい“人間”として幸せに暮らせてる。あの頃、こんな生活ができるようになるなんて思つても見なかつた…。これもある人とガープさんのおかげだよ。」

本当に幸せそうにそう語るユーナに、ガープは瞳をうるわせてただ「そうか」と呟いた。

次の日誰よりも早く起きて、朝ごはんの準備を始めていたユーナは起きてきたみんなに何事もなかつたように挨拶をする。

「あつみんなおはよう！朝ごはん出来るよー」

そんなユーナにいつも通り返事をするダダン、エース、ルフィ。だが、ユーナが倒れてからここで生活し始めたサボはワナワナの震えながら、ユーナを指差して言う。

「ゆ、ユーナ!! 目が覚めたのか!!」

そんなサボの言葉に我に帰ったルフィはユーナに抱きつき、ダダンは瞳をうるわせながら、悪態をつく。

「ユーナ!!!」

「つたく、今度おんなじことしやがつたら承知しねーぞこのガキ。」

それぞれの反応に、自分はちゃんと愛されていると実感したユーナは心中でみんなに感謝の気持ちを言いながら、返事をした。

「みんな、ただいま！」

その言葉に、ずっとここにいたのに何言つてんだ。と言いながらも「おかえり、ユーナ！」と返すみんな。だが、ユーナが目覚めてから一言を言葉を発しない者がいた。エースだ。そんなエースの様子に心配になつたユーナは下を向きこつちを見ようとしないエースの顔を覗き込んだ。

「え！ エース!? どうしたの?!」

覗き込み、ユーナは驚く。あのエースがだ。あのエースが唇を噛み締めながら泣いていたのだ。そのことに気づいた全員驚きすぎて硬直している。

「うるせえ！ こつち見んな!! バカ！」

そう言いながら、ユーナ達から顔を背けるエース。

そんなエースにユーナはニヤリと笑い、からかう。

「な、にエース、泣き虫は嫌いなんじやなかつたっけ〜」

「なつ!! われは泣いてね〜!!」

ユーナにからかわれ、涙を乱暴にぬぐつて泣いてないと証明するようユーナの方に顔を向けたエースは突然抱きついてきたユーナに

驚き、本当に涙が引つ込んだ。

「ありがとう。エース。エースがあの時呼び起こしてくれたから、私はまたここに戻つてこれた。本当にありがとう。」

さつきのからかう口調から突然真剣な声色でお礼を言うユーナにエースは戸惑いつつも、言葉を返す。

「つたりめーだろ。ユーナの帰る場所はここなんだからな。」

「うん！」

そんな2人のやりとりに目をうるわせていたダダンはそれを誤魔化すようにご飯を早く食べると急かすのだつた。

食後、エースはユーナに大事な話があると言つてコルボ山に呼び出した。呼び出された丸太の元へ行くと、エースだけでなくサボやルフィの姿もある。

「えつと、どうしたのみんな？大事な話つて？」

ユーナの問いに、3人は顔を合わせて頷いた後丸太の上にダダンの酒と盃を4つ置く。

「話の前に、やることがある。」

「…」

エースの真剣な眼差しに、息を飲むユーナ。

「ユーナは知つてたか！盃を交わすと兄弟になれるんだつてよ！スッゲーよなー！」

ルフィが言つた “兄弟” という単語にピクリと反応する。

「…兄弟…」

「そうだ。ユーナ、俺たち兄弟になろう。絶対に切れない絆を作ろう。そして…ユーナの背負う闇を俺たちにも背負わせてほしい。」

サボの言葉に3人がどうしてそんな事を言い出したのかわかつたユーナは嬉しいような悲しいような苦しいようなそんな複雑な顔をした。

「あはは、兄弟か～それもいいね。でも、私の持つ闇をあなた達に背負わせることはできない。エースも、サボもルフィも私にとつてはその

闇を忘れさせてくれる光なの。これは譲れない。」

そんなユーナの返事にある程度予想していたエースとサボ。

ルフィは不満げに唇を尖らせる。

「えー！ ユーナは兄弟にならねーのか!?」

「ルフィ、ユーナも必ず兄弟になるからちよつと待つてろ。」

話を進めるため、ルフィに遠回しに喋るなというとユーナに向き合う。

「ユーナの言いたいことはわかる。でも俺たちは！ ユーナを守りたいんだ！ 何も知らぬー今そのままじゃ、また……。俺はもう、あんな思いしたくねえ！」

エースは今でもユーナが倒れた時のことと思い出すと、手が震える。ユーナがどこか遠くに行つてしまいそうで怖いのだ。

「ユーナ。俺にも秘密がある。みんなには言つてなかつたけど、俺は…貴族の息子なんだ…」

その告白に驚き声を上げる3人。

「まあ、驚くよな。なんで貴族の息子がこんなところにいるんだー。つて。でも、お前らには悪いけど俺は親がいても1人だつた。あいつらが見ているのは俺じゃない。地位だけだ。…生まれも育ちもかけ一ねえ。貴族の息子だろうと、俺は俺だ。鬼の血を引いていようが、エースはエースだ。ルフィもルフィだし、どんな闇を抱えていてもユーナはユーナだ。俺たちは誰もお前を否定しない。兄弟の絆にそう誓う。」

エースとルフィも同じ気持ちのようで頷いた。

ダダンの酒を開けて、盃に注いでいくエース。そしてそれを手に取りユーナに1つ手渡した。

「ダダンに言われたんだ。ユーナの事を知りたかつたらそれ相応の覚悟と代価を払えって。代価は…俺達には難しくてわかんねえ。でも、これが！ 俺たちの覚悟だ!! 受けとつてくれ、ユーナ！」

背負わせたくない気持ちもまだある。でも、信じてみたいと思った。兄弟になりたいと思つた。兄弟になりたいと思つた。ユーナは恐る恐る盃を取り、大きく深呼吸をした。

「ほんと、君たちには敵わないな。後悔しても知らないからね！」  
ユーナが盃を手に取つた事で3人は嬉しそうだ。

それとも盃を手に取ると、4つの盃が重なり音がなる。

「今日から俺たちは、兄弟だ!!」

「おう!!」

「うん！」

こうして、姉1人、真ん中2人、弟1人という4人兄弟がここに誕生する。この4人は今後世界を大きく揺るがす存在になるのだが、それはまだ先の話…。

## ユーナの過去が明かされます。

兄弟になつたのだから秘密は無しだ。

そう言いたげな3人の瞳にユーナはポツリと少しずつ昔話でもするように話し始めた。

「昔々、あるところに不思議な模様の実を食べた少女がありました。その実は悪魔の実と呼ばれ、食べたものに力を与えます。その少女が食べたのは”キヨヒキヨヒの実”と呼ばれ、とても珍しいものでした。その少女の噂を聞きつけたある男はその少女を買い、自分の所有物にしたのです。」

—12年前—

3歳の少女は自分に何が起つたのかわからぬまま鎖に繋がれ、歩いていた。首には重たい海楼石の首輪。同じような格好をしていた男が首輪を外そうとして爆発した事で、少女もこの首輪が怖いものと分かつていて、ただ、歩くしかなかつた。そして連れてこられたある1室：そこで少女は人間以下の烙印、“天驅ける竜の蹄”を背中に焼き付けられた。その後、天竜人の間で話題になる奴隸がいた。その奴隸は悪魔の実”キヨヒキヨヒの実”的能力者で、自分の身のあらゆるもの拒絶することができるのだ。攻撃も光も音も痛みも老いも怪我もさえも。だから天竜人達はわざわざ海楼石の刀や銃弾を持ち寄り奴隸を痛めつけることを楽しんでいた。

「この奴隸は最高だえ～。刺してもよし、撃つてもよし。何をしてもすぐに治るからやり放題だえ～。」

そう言つて天竜人は奴隸の足に思いつきり刀を刺した。

グサツ！

「グツ～！ああああ！」

悲鳴が聞こえても笑顔を絶やさず、容赦なく刀を抜く。

そうすると海楼石で封じられていた拒絶の力が戻り、傷がみるみる治つていく。それが楽しくてしようがないのだ。

「面白いえ～！今度はこつちだえ～！」

天竜人は今度は銃を持ち、奴隸に狙いを定める。

「ああああああ！」  
「バンツ！バンツ！バンツ！」

だが、今度はなかなか傷が治らない。

理由は簡単、弾が貫通せずに体に残っているからだ。

天竜人もそれに気づくと、先ほど使った刀を弾のあるところにねじ込み弾を強引に取り出す。

「ガツ！ああああ！…ハアハア…もう、やだよ、ころして…！」

奴隸はあまりの痛さに殺して欲しいと願うが、天竜人にとってそれはおもちゃを無くすことになる。当然聞き入れることはなく、急所以外のところを狙つて攻撃を繰り返した。

何日何年、そんな日々を送つたのだろう。

逃げたくても拷問のような時間が終わるとすぐに海楼石付きの首輪がはめられ、動くことができず、ただ淡々と時が過ぎていき、次第に奴隸は感情を失つていった…。

そんな中、好機が訪れた。

看守が首輪をつけ忘れたのだ。奴隸の瞳からはわずかに光が戻り、1人こつそり逃げ出した。だが、疲れ果てた奴隸にとつてこれから生きる元気はなかつた。生きたとしても一生ついてまわる奴隸の印。奴隸は赤い土の大陸から飛び降りた。その顔に失っていた涙と笑みをこぼしながら…。

「これで…じゅうだ。」

次の日、天竜人達は海軍本部に捜索を命令した。天竜人にとってあれほど最高の奴隸はいないからだ。海軍大将まで巻き込んだ大捜索をもつてしても最後まで奴隸を見つけることができなかつた。その後、どうしても諦めきれない天竜人はある命令をする。それはその奴隸を指名手配することだ。その奴隸は5歳でありながら、高額の値をつけられた。

5,000,000-

「これが、私の過去。」

自分の手配書を見せながら、そういうユーナは自分の体を抱きしめて震える体に耐えていた。エースとサボとルフィは想像をはるかに超えるユーナの壮絶な過去になかなか言葉が出てこない。

「あは、人間以下の私なんか姉とは呼べないよね！いいの！少しの時間だけど、みんなと兄弟になれて嬉しかった！あなた達は3人兄弟！私は赤の他人！それが1番いいんだよ！」

ユーナは作り笑顔でそういい、その場を離れようとした。

そんなユーナをエースは追いかけ抱きしめた。

「ユーナ！俺たちにとつてユーナは奴隸でも人間以下でもねえ。俺たちと同じ人間で、俺たちの兄弟だ!!」

そこにサボとルフィも来て、涙を浮かべながら…ルフィは号泣だが。それぞれの気持ちをしつかりとユーナに伝える。

「エースの言う通りだ。いつたろ？ユーナはユーナだ。話してくれてありがとう。今の話を聞いて世界貴族を憎むことはあっても、ユーナを嫌いにはならぬよ。」

「うつぐスッ。ユーナ！お、れ、！海賊になつて！えつぐ…グスツその天竜人つてやつに会つだら…うう…ぶつ飛ばしてやつからな、！」

3人の変わらない態度にユーナは涙が止まらなかつた。

受け入れてくれるかどうか、怖かつた。こんな私を受け入れて、兄弟してくれたこの3人にユーナは守りたいと強く思つた。

「ありがとう…！3人とも…！本当にありがとう…！グスツ…でもルフィ、天竜人はぶつ飛ばすのはまずいよ…」

「「えつなんですか？」」

ルフィだけでなくエースとサボにも言われて、ユーナは涙を引っ込めてつつこんだ。

「ダメに決まってるでしょ!! 捕まるわよ!!」

「「「どのみち俺達海賊になるんだから一緒だ。」」

「そつ!! うだけど…はあ、まあいいや。どのみちいつても聞かないだろうし、その時のエース達の仲間に止めるの託す。」

しばらくの沈黙が続き…4人は吹き出した。

「「「あははははははは！」」

「あー、喋つたらスッキリした!!」

そう言つて大きく伸びをするユーナにサボは少し疑問に残つてたことを書く。

「そういえばユーナ、この手配書ゼノって書いてあるけど…ユーナは偽名か?」

「ん? ああ、違うよ。どつちも本名! 言つてなかつたね、私の名前はユーナリー・D・ゼノ。改めてよろしくね! 弟達!」

「ああ、姉貴!」

「エースは姉貴か! 僕は姉さんかな!」

「おれは!! ねえちゃん!」

「あはは、わあ、新しい響く!」

「じゃあ、ルフィイ俺のことはにいちゃんと呼ぶんだぞ。」

「エースはエースだ!」

「なんでだよ!!」

「もういいだろ、いつも通りで。」

「だね!!」

そんなにこやかな会話を覗き見していた人物が2人いた。

1人はガープ。ユーナの晴れた顔を見て安心したのと同時に孫が増えた事が嬉しいようですがくにこやかだ。

そしてもう1人のダダンは、言わずもがな大号泣だつた…。

## ユーナ、旅立ちます。

エース達と兄弟になつた日の夜。

ユーナは外で1人お酒を飲むガープの元へ行く。

「ガープさん。ごめんね。今日あなたの大切な孫と兄弟になつた。後悔はしてない…けど、あなたには恩を仇で返す形になつてしまつた。本当にごめんなさい。」

そう言つて頭を下げるユーナ。

そんなユーナの頭をぐしゃぐしゃと撫でるとガープはユーナを抱きしめた。殴られ、怒鳴られることを予想していたユーナはガープの行動に戸惑う。

「そうか…兄弟になつたのか。それは良かった。お前さんはなかなか認めてくれなかつたが…これでユーナも正式なわしの孫じや!!辛い時は泣きついでこればいい！寂しい時は甘えてこればいい！わしは何があらうと、ユーナを愛しとるぞ！」

「が…ガープさん…」

「こらつじいちゃんと呼ばんか！」

そうやつて怒るガープに本当に自分がその家族の輪に入ることを許されたと感じるユーナは泣きながら初めてガープを祖父として呼ぶ。

「お…じい…ちゃん…うわあああああん！本当は…怖かつたの！エース達に私の過去を知られて、もう一緒にいられなかつたらどうしようつて!! 私みたいな、汚れた存在がその輪に入ることは許されないつて!! 私が幸せであればあるほど…怖い！今度はエースが…ルフイガ…サボが！おじいちゃんが！不幸になつたらどうしようつて!!」

初めて聞くその本音にガープの頬には涙がつたう。

ユーナはまだ15歳。そんな子が自分の幸せを怖いと感じるこの世界が…世界貴族がガープは憎いとさえ思う。せめてこの子が、もう2度とあんな思いをしないように守ろうさつきよりも力強くユーナを抱きしめるのだつた…。

しばらく溜まっていた涙を出し続けていたユーナは、疲れ果てて眠ってしまった。そんなユーナを布団に寝かせるとガープはエースとサボ、ルフィに大切な話があると言つて外に連れ出した。

「なんだよじじい。大切な話つて。」

「ユーナのことじや。」

その返答にさつきまでのだるそうな雰囲気は消え、一気に真剣な顔つきになる3人にガープは満足そうに頷いた。

「お主ら、兄弟になつたんだつてな。ユーナに聞いたぞ。」

力強く「おう！」の返事をする3人。

「じゃあ、話しておく必要がある。：ユーナの能力、いや悪魔の実についてじや。」

「ユーナとルフィが食べたやつだな！」

「そうじや。悪魔の実の能力者は海に嫌われ、カナヅチになる。それは知つておるな？」

ガープの問いに頷く3人。

「人間離れした力を手に入れても元は同じ人間の体。無茶な使い方をすれば、当然体にダメージがたまり、がたがくる。」

「じゃあ、今回：ユーナは無茶したから数日間目を覚まさなかつたのか？」

「そうじや。ユーナの拒絶の力は万能ではない。拒絶するものが大きければ大きいほど当然リスクも伴う。：まあ、ユーナもこのことはわかつておるし普段無茶をすることはないんじや。ただ…」

ここで言葉が詰まるガープに3人は??マークを頭に浮かべ続きを促す。

「「「ただ??」」

ガープは拳を強く握り、辛そうに話した。

「ユーナの過去をお主ら聞いたじやろ。あの子の過去は…酷いものじや。あんな事をされて平気なわけがない。10年経つた今でもまたわり付いてくる記憶に支配され暴走ことがある。何かが引き金となつてな…。」

エースとサボは思い出す、2人が駆けつけた時のユーナの様子を。

周りが見えてなくてただ、全てを拒絶するように立つユーナにエースは触ることもできなかつた。

「あの時のユーナは別人のようだつた…感情をなにもかも失つたみたいに…冷たい目をしてた。」

「…感情を殺さなければ耐えられなかつたのじやろう…。いいか？能力の暴走はユーナの自己防衛が働いた結果じやが、それを続けていれば必ずがたがくる。お前ら3人…弟としてしつかりユーナを支えてやるんじや。」

エースとサボ、ルフィはその事を知りもつともつと強くなる事を3人で誓い合と、次の日から100本勝負が日課になつた。時々ユーナも参加しながら4人切磋琢磨して力をつけていく。そんな兄弟にあんな悲劇が起こるなんて、この時は誰も思つていなかつた…。

ある日、いつものように100本勝負をしていた4人。結果はユーナ300勝0敗。エース152勝46引き分け102敗。サボ150勝46引き分け104敗。ルフィ0勝300敗となつた。

「くそー！ ユーナ！ お前能力なしにしろよ！」

「うーん。わたしもそうしたいんだけど…なかなか…ごめんね？」

そう、ユーナは攻撃が来ると無意識に拒絶してしまい、バリアを張つたように誰の攻撃も届かないのだ。

「まあまあ、エース。落ち着けつて！ 海賊旗作るんだろ？」

「そうだぞ！ エース！ 早く俺たちの海賊旗つくろうぜ!!」

そんなエースをなだめるサボはそう提案するとルフィも早く早くと急かした。そう、ダダンたちに独立すると宣言して秘密基地を作つた4人。あと残すは4人の海賊旗を作り、飾るだけなのだ。

「そうだな!! 行こうぜ！」

そう言つて秘密基地へ走る3人を微笑ましく見ながら追いかけるユーナ。

「やつぱり俺たち兄弟の頭文字をとつて、Y A S Lか？」

「そうだな。その後ろにばつ印を入れれば立派な俺たちの海賊旗だ！」

「いいなうそれ！かつちよい～～！」

そう言つて地面に棒でイメージ図を描いていく3人だが、ユーナは黙つたまましばらく考え込んでいた。

「ユーナ？どうした？」

サボがそう問いかけるとユーナは考えがまとまつたようで、こう提案する。

「ねえ、あのさ。わたしの下の名前ゼノじゃない？だから、A S Lにして後ろのばつ印をXと考えれば、4人の頭文字が入るし、何よりそつちの方がまとまりが良くない？」

それを聞いたサボが「なるほど」と言つてさつきの書いた横にユーナの案の海賊旗を書く。たしかにこつちの方がまとまりはいいが、エースは微妙な顔だ。

「たしかにまとまりはいいけどよ？これじやはたから見りやユーナが入つてねーじやん。」

「そうだけど。見て、これだと私がみんなを見守つているような感じがしない？これからみんながそれぞれ海に出てそれが海賊旗を持つのだとしたら、みんなの海賊旗に私の名前が入るの！それを想像したらなんだか、常にみんなの側にいるような気持ちになるかなうつて思つたんだけど…ダメかな？」

そんなユーナの提案にそれぞれ自分の海賊旗を想像してみる。

「…それ、いいな。」

ボソツとサボが呟く。

「たしかに…もし、俺たちがそれぞれ違う道に行つたとしても、これらユーナが近くにあるみたいだな！」

「これがいいと思うぞ！俺!!」

「決まりね！」

こうして、赤いA青いS黄色いLの後ろに白いばつ印を書いた海賊旗がその秘密基地に建てられた。

その数日後、サボが家族の親に連れ戻された。

サボの幸せを考え、連れ戻しにも行けずただ、サボがいない毎日を

過ごす3人はある日ブルージャムに誘われ、荷物運びの仕事をする。

それが、事件の始まりだつた。

燃え上がる不確かな物の終着駅にブルージャムに行く手を阻まれる3人。ユーナの拒絶の力で火や煙を防ぎ、なんとか逃げ延びるも、その後3人の元に届いた知らせに絶望するしかなかつた。

### サボの死。

それも今もユーナを苦しめている存在である世界貴族の手によるものだ。悲しみに明け暮れるエース達の元にサボからの手紙が届く。その手紙を読み、サボの分まで生きることを決めた3人はある誓いを立てた。

「俺たちは悔いのないよう生きるんだ！ いつか必ず海に出て！ 思いのまま生きよう！ 誰よりも自由に！ 出港は…17歳だ！」

色々あつたが、2年という月日はなんとも早いものだ。

ユーナは17歳になり、エースとルフィに見送られながら一足先に海に出た。

「みんなと違つて海賊になりたいわけじゃないけど…やりたいことは決まつて…。私もこれでおじいちゃんとは敵同士か。」

ユーナがやりたいこと…それは自分を苦しめ、サボを殺した天竜人を潰すこと。そのためにユーナはある組織に入る…。

『革命軍』ガープの息子であるドラゴンが率いる組織は、ユーナと同じく元奴隸も多い。この場所でユーナは自分のために、兄弟のためにに戦う。

## ユーナ、アラバスタへ

ユーナが革命軍に入つて早5年が経つ。

そんなユーナが今か今かと楽しみ待つて いるのが、エースの記事だ。

兄弟で夢を語り合つた時、エースは「名声を手に入れる！」と言つていたので、絶対に新聞に載るとユーナはふんでいる。

「ユーナ！お待ちかねの今日の新聞だぞ～！」

そう言つて新聞を持ってきた人物がいる。

ユーナは5年前、革命軍に入隊してとても驚いた。

自己紹介をしたその日にドラゴンに案内されたのがコアラというユーナと同じ元奴隸の少女の元だ。歳も近いし、お互い気があうだろうとのことだつた。そして、その少女のいる子供達の訓練場に向かうと見覚えのあるシルエットを見た。青いどこか貴族を思わせる服に鉄パイプを振り回して戦う金髪の少年。そう、サボだ。サボが生きていたのだ。ユーナはその姿を見て泣き崩れてしまい、ドラゴンには驚かれたものだ。その後、事情を説明するとドラゴンは言いづらそうに言葉を濁しながらサボが記憶喪失だとユーナに伝えた。最初はそのことにただシヨツクが大きくてどうサボと接していくべきのかわからなかつたが、死んだと思つていたサボが生きていたのだ。それだけでいい。それ以上を望んだらいけないと、「はじめまして」そう挨拶をした。なのでサボとユーナが兄弟だと知るのは今はドラゴンのみ、そのドラゴンも事情を説明する時に出したルフィの名前に父親だと言われてまたこれびっくり。不思議な縁だとユーナは思ったのだった。

そんなサボが持つてきた新聞を受け取り中を開くと、ユーナは目を輝かせ1枚の紙を見て嬉しそうにわらつている。

「きたきたきたー！エースがきたー！みて！サボ！これ、私の兄弟なの！かつこいいでしょー！」

そう言つてエースの手配書をサボに見せるユーナ。  
初めて見るはしやぎように驚きながらサボはその手配書を見る。

「へー。これがユーナの兄弟か。俺と同じくらいか??」

「正解！ 同い年だね！」

ユーナは心の中で（あなたも兄弟なんだけどね。）と思いながらサボの問いかに答えると、手配書を大事そうに持つて自分の部屋に戻った。そして壁に貼ると満足顔だ。

「さて、ルフィは3年後か。楽しみだな。」

ユーナはエースの手配書を触るとポツリと話しかけた。

「ねえ、エース。サボは生きてたよ。私たちの兄弟はあいつらに殺されてなんかなかつた。私たちのことは忘れちゃつたけど、ちゃんと生きてる。」

いつのまにか出ていた涙をふき、頬を叩くとユーナは任務に出かけるために準備を始めた。

数ヶ月後、ユーナは休暇をもらいエースに会いに行つた。エースは私が革命軍に入つたと聞いてとても驚いていたが、ユーナの過去を知つているためすぐ納得していた。途中ルフィの話やサボの話が出たが、ユーナはサボが生きているということ伝えようか迷つたが、やめた。このことはルフィと3人であつたときに話したいと考えたからだ。だからそのことを伏せて近状報告をし、たくさん話した。

そしてあつという間に月日が経ち、3年。ルフィが出港する年になつた。この3年でエースは白ひげ海賊団2番隊隊長にまで上り詰め、一気に有名になつた。サボは次期総長と言われるほど強くなつた。もちろんユーナも革命軍の中で上の方に入つてている。だが、ルフィの活躍は想像以上で、エースもユーナも毎回驚かされる。アルビダがら始まりモーガン、バギー、クロ、クリーク、そしてアーロン。ルフィの首に懸賞金がついた時はエースとユーナは揃つて仲間に自慢し、その仲間たちにブラコン認定されたのは、言うまでもない。

そんなある日ユーナはルフィとエース2人がアラバスタに向かつているという情報を入手した。アラバスタには王下七武海の1人クロコダイルは革命軍内で調査対象に含まれている…ユーナはアラバスタに行くためその任務に立候補した。

「……がアラバスター。ふぅ…暑いな。」

ユーナはついて早々、気温の高さに驚いた。

そして、流石にきついと感じたユーナはボソッと眩き能力を使う。

「熱の拒絶 ヒート」

これによりユーナは熱気を感じなくなり、気分も良くなつたので早速任務に取り掛かりつつ2人の情報収集をする。

「あの、この辺りで麦わら帽子を被つたうるさいぐらい元気なやつと、オレンジの帽子を被つたそばかす男見ませんでした？」

「いや、見てないねー。」

「そつかく、どうもありがとう。」

だが、なかなか情報は集まらない。どうしたもんかと思案していると、突然目の前に見覚えのある麦わら帽子が勢いよく横切つた。「メシー！」という叫びとともに。

「……ルフイだね。あれは。」

なんともルフイらしい行動に若干呆れながらも変わらない姿に嬉しく思うユーナは、ルフイが飛んで行つたお店に向かう。

ルフイが突き破つた壁から中を覗いたユーナは何件も巻き込んだであろう形跡を見て顔を引きつらせた。

「……1回離れよう。」

巻き込まれることを恐れ、離れて様子を見守ることにしたユーナは数分後、お店から慌てて出てくる3人の人物を見て驚いた。ルフイとスマーカー遅れてエースだ。ルフイだけでなくエースも一緒にいるとは運がいいとユーナは思いながら追いかけるとルフイは仲間たちと合流、そしてエースがルフイに伸びるスマーカーの手を防ごうと能力を使つたところだつた。

「陽炎！」

突然自分たちを守る様に現れた炎に驚き逃げる足を止め振り返るルフイ達だが、なぜ自分たちを助けたのか分からず困惑している。ルフィ以外は。

「エース？」

「変わらねーな。ルフィ！」

「エース！ エースか！ おめー悪魔の実食ったのか！」

「ああ、メラメラの実をな！」

「うんうん。ほんとびっくりだよねー。」

「……?!」

いつのまにカルフィの横にいて、会話に参加するユーナにみんなが驚き振り向く。

「や！ 久しぶりだねー エース！ ルフィ！」

「ユーナ！ お前もここにきてたのか！」

「ユーナ？ ユーナ？ ユーナだ！ ほんとにユーナだ！」

完全に蚊帳の外にされているゾロたちと海兵だが、スマーカーが目の前にいるルフィを逃すわけがない。

「ホワイトブロー!!」

それに気づき、また炎で応戦しようとエースの肩に手を置きユーナは前に出る。

「エースの能力じや目立つて他の海兵を呼んじやうでしょ？ 私に任せ  
て！ … 拒絶の壁 “バリア”（ボソツ）」

何もないはずなのに透明な壁があるかのように入スマーカーの腕は阻まれてしまう。

「てめえも悪魔の実の能力者か。」

「正解！ ルフィ！ 仲間たちと先に行つて！ 話は後でゆっくりしよう  
！」

「ここは俺とユーナで食い止める！」

そういうと「わかつた！」と行つて走り出すルフィとそれを慌てて追いかけるゾロ達を軽く目でおい、スマーカーに向き合う。

「わからねえ。なぜ麦わらを助ける。」

その言葉にユーナとエースは顔を見合させてからニヤリと笑い、声を合わせていう。

「できの悪い弟を持つと兄貴（姉）は心配なんだ（よ）」

「弟……で、火拳はともかくてめえは何もんだ？ 兄弟揃つて全員海賊か？」

スモーカーは兄弟である事には対して興味がなさそしだが、謎に包まれたユーナの正体を問う。

「そうやすやすと教えるわけないでしょ？白獣のスモーカー大佐。行くよエース。」

「え？ああ。」

そう言つて歩き出すユーナとエース。

海兵はおいかけようとするが、四方八方見えない壁に苛まれ動けなかつた。

「スマーカー大佐！これでは追いかけられません！逃げられてします！！」

自分たちが持つ武器で叩きなんとかしようとするもビクともしないその壁に焦る海兵。スマーカーは微動だにせずただ、ユーナをにらんでいた。

「やつぱりすげーなユーナの能力は！」

「……うん。」

興奮気味にそういうエースに困ったような笑顔でそう返すユーナ。

「まだ…好きになれねーんだな。その能力。」

「……まあね。前ほどではないけどまだ…ちょっと。」

「そつか。いつか、好きになる日がくるといーな。」

「うん。…そんなことより！ルフィに会いに行こう！なにせ8年ぶりだからね！」

無理やり話題を変え明るく振る舞うユーナにエースは笑顔で返す。心の中でユーナが早く過去から解放されることを願つて…。

その頃ルフィは仲間たちと船にいた。

「本当なのルフィ？の人たちがルフィのお兄さんとお姉さんつて！」

そう問い合わせるナミに満面の笑みで「ああ！」と答えるルフィ。

「でも、なんでルフィの兄弟がこんなところに。」

「エースは海賊なんだ！俺より3年前にワンピースを狙つて島を出たんだ！ユーナは海賊じやねーけど8年前にな！まさかこんなところで会えるなんてなく！」

そう言つて本当に嬉しそうに笑い、エースとユーナがくるのを待つ

ルフィ。だが、エースとユーナの実力を知らないゾロたちからすれば大丈夫なのか不安になる。

「でもよかつたのか？ただの海兵ならともかくあの大佐の相手だぞ？」

「大丈夫だ！俺のねえちゃんとにいちやんは強えからな！」

ルフィの強いというセリフにチョッパーは聞き返す。

「強いのか。あいつ。」

「ああ!! エースは昔はメラメラの実なんか食つてなかつたけど、俺は1回も勝てなかつたし、ユーナはそんなエースに1回も負けたことねえんだぞ!!」

ルフィの実力を知つてゐる為、驚くゾロたち。

特にウソップなんか「やつぱ怪物の兄は大怪物。そしてその姉は大怪物か。」とつぶやいている。

「そうさ！俺なんか負け負けだつたー！あはは!!でも今やつたら俺が勝つね！だーはつはつはつ」

それをエースとユーナが聞いてるとも知らずに豪快にそう言い放つルフィ。

「へーだつてよエース！」

「誰が誰に勝つって!? ルフィ！」

そんな声といつしょに突然2人がメリーア号に乗船した。

その際驚いたチョッパーとウソップはそれぞろとサンジの後ろに隠れる。ルフィは嬉しそうに2人の名前を呼んだ。

「エース!! ユーナ!!」

そんなルフィの姿に8年ぶりのユーナはゆつくりと近づきルフィの頭に手を乗せた。

「本当に、おつきくなつたねルフィ。あんなに小さくて私たちの後ろを必死に追いかけてた子が…強くなつた…！」

そうやつて愛おしそうに自分を見るユーナに、ルフィは笑顔で返す。

「おう！ユーナとエースには負けてらんないからな!!」

「そつか…うん！私も負けない！」

そう言つてニコニコと笑い合う2人に周りはすっかり和んでいた。

その後、サンジがユーナにメロメロになつたりバロックワークスに襲われたりしたが難なく擊破。エースとユーナはルフィイ達としばらく共にすることにした。

ユーナは悩んでいた…3人で会えたら伝えようと思つていたサボのことを。どう伝えるのか：それが正解なのか間違いなのか。ユーナはわからぬいでいた。